

の見透しなど、危惧の念も相当ありました。しかし顕彰碑を建立する点では異議はないので、これを第一期事業となし、生誕地と広島大学医学部校内の二カ所に碑を建立するのに成功しました。

引きつづき、第二期事業として先生の数多い著書のうちから、要望に応じて複製を始めようと公約したのですが、現実には意の如く運ばず、立往生の已むなきにいたりました。

幸い富士川英郎氏の計いにより『富士川游著作集』『医談』が相次いで発刊され、このたび『富士川游』の出版に及び、我々の企画を埋めていただきました。

顕彰会の面目を立てていただいた点で、我々の喜びは格別のものであります。

ただ、故三枝氏が『富士川游先生』の中で分担された游先生の精神面、信条、宗教分野、人間性についての概説は今日なほ貴重な価値を失ってはいないので、広大なこの分野をこのたびの『富士川游』の如く、詳細に亘って教示されていただければと願うのですが、今更叶えられず、悔いは千載に残ります。

宗教分野の著書はぼちぼち店頭に出ていますので、我々顕彰会の肩の荷も幾分軽くなっています。

改めて富士川英郎先生の営為に対して感謝の意を表します。

(中川 和夫)

〔小沢書店、一九九〇年、A5判、三五九頁、

定価四、六三五円〕

岩波泰明著『御目医師 竹内新八』

本書の内容は大体三部から成っている。

第一部は、江戸時代医学史上日本の四大眼科の一つとして有名であった諏訪竹内流眼科として知られた竹内家（代々竹内新八と称した）の由来記と、従来その内容のよく判らなかつた眼科診療の内容を解明したものである。

第二部は、竹内流眼科を実施した人たちの伝記を主材として著者の文芸創作『秘伝』（諏訪のめいしあり）で、第三部は、家伝の医書『玉泉房流秘書』（全）の複製を取載する。

第一部を主材として、眼科学史の立場からその内容を紹介する。著書は竹内流眼科について次のように述べている。

「伊豆下田から奥三河振草郷に移り済んだ伊東氏一族が、その地に下田村を建設し、その一族の一人が竹内と姓を改め医業を始め、しかもその医業は啓迪院医学校で正式に修得した医学にもとづくものであったということである。その後或は甲斐の徳本の医術も学んだかもしれないし、鳳来寺の眼科医学も取り入れたであろう。急速に進んだ日本の医学を、巧みに取捨選択して素晴らしい竹内流医学を組み立てたのであるが、爾来、竹内流医学は曲直瀬道三の「慈仁」と竹内家の血の中に脈々と流れる「研究心」によって、日本の眼科医の水準に到達していったと見たのである。」

従来、諏訪竹内流眼科では、各代とも竹内新八を称した結果、その著作や事蹟が何れの新八に属するものか不明なものが少くな

かった。著者は、種々考証を加えてこれを明らかにした結果、

「諏訪竹内家が甫久以来の竹内流を集大成したのは、持規・持賢・持長の時代であることは間違いない。しかも、竹内流は蘭漢折衷派の代名詞のようなものであった」と説いている。

江戸時代日本には赤目（主として感染症）が多かったが、白内障などで失明している患者も少くなかった。したがって、眼科医として名声を博するには、針立て（白内障墜下法手術）によって、失明者をより多く見事に開眼する必要があった。日本の四大眼科と称された医師たちは、この手術に色々工夫を加えた名人であった。

竹内流眼科では、従来の直針逐下法から横針墜下法へと進み、散瞳薬としてロートを使用して手術の成功率をたかめ、消毒薬として胆汁を点眼したようである。ただし、その手術の詳細については一子相伝として秘伝のまま伝わらなかつた。

「針術之秘法」の項に次のように記されている。

「吾流ハ世医ト違ヒ、奥術ノ針ヲ用ルコト、晴天ヲ伺ヒ、朝五ツ時ヨリ四ツ時ノ内ニ急グナリ、御針ヲ立ント欲スル前三日ヨリ、辰砂五分白湯ニ入、一日三杯ツ、用ヒ置キ四日目ニ針ヲ立ル時ハ冷水ニテ用ユ、ハリ本ニテ玉ヲ軽ク突テハ病人ノ氣ヲ伺ヒ見ルナリ、夫ヨリ針ヲ二本ノ指ニテ持チ、少シヒヘル心ニテサスナリ、口伝アリ、先毒ノ浅深ヲ能ウカカヒ、大概ハ二分位ヨリ四分位マテサス也、指シヌル針ノ先ニテ白キ膿ヲ回転シ散ラスナリ、クルルト針ヲマハス也、其時ノ針ノ持チヤウハ口伝アリ、亦針ヲ入レマハシテモ膿ヲラス、上ヘノホリテ針本ニツキタルハ悪病ナリ、

カヨウナル針抜クト膿出ルモノ也、針ヲチヨイト抜クヘシ云々」。

「いざ手術にとりかゝるとなると、呪文を唱え、朝方庭前で、横臥した患者の手足を門下生が堅く押えて動き出さないようにしていたという。大きな傘をたて、その一箇所に小さな穴を明け、そこから差し込む日の光で難手術に挑んだことは、江戸の末期まで続いた。

手術用具のいろいろ 諏訪竹内家に残る「一子相伝秘録」には、手術の諸道具として

- 一、金ニテヒカシ針大小二本
- 一、金ニテカケ針一ツ
- 一、金ニテゴミトリ針一ツ
- 一、ハサミ五丁
- 一、銀ニテシャジ一ツ
- 一、銀ニテブンチン三本
- 一、シチュウ合皮二ツ
- 一、シチュウ大シャジ一ツ
- 一、ケヒキ一ツ
- 一、銀ニテメス
- 一、中ハサミ一丁
- 一、ケヌキ一丁
- 一、コテ鉄二丁
- 一、銀ニテ温金一丁
- 一、ヘラ大小ニテ二本

なお、竹内流眼科新八の名声が全国にひろく知られるようになった原因として同書には次の記述が載っているのは興味深い。それは、藩公が眼科の名医として彼を藩医に召し抱え、参勤交替には彼をつれて往来し、その宿泊の旅館で近隣の眼病患者を治療せしめ、江戸では在勤諸大名の治療を行わしめ、時には、江戸城中で老中など高官の治療を命じたという。（「見聞茶談」・「当分申事」など）

また、竹内家は、単に卓絶した技術をもった医家のみではなかった。代々の当主が文化に関心を寄せて、当代一流の文人、画人が留春園を訪ねている。伊藤東涯に師事して儒学を学んだ三代新八持堅は、字は其則、号を淇園といい、文芸に最も心を寄せた人物であった。

竹内家の菩提寺地蔵寺には「病人様のお墓」(有縁無縁供養塔)が建てられていた。これは、眼療のため全国から諏訪の地へあつまつて来た患者(時には、付添人)の中、不幸この地で病没した人たちの墓所であった。主人竹内新八の心のやさしさがしのばれる。

(福島 義一)
〔ある企画〕一九九〇年、A四判、四七〇頁、非売品〕

Edited by Y. Kawakita, Shizu Sakai and Y. Otsuka
History of Hygiene—Proceedings of 12th International Symposium on the Comparative History of Medicine—East and West

現代の視点から医学史を学ぼうとする時、そこにいくつもの落とし穴のあることに注意しなければならない。その一つは、現在何の疑いもなく広く使われている医学専門用語が、実は時代の流れの中で大きくその意味を変えている場合である。このシンポジウムの主題である Hygiene も、きわにその一例である。

日本では普通 Hygiene を衛生、Public Health を公衆衛生と訳しているが、内容的にみて二つの日本語の間にはほとんど区別がないので、この二つを同義語と割り切っても大きな誤りにはならない。そして、このような見解をとるには根拠がある。

一八六五年、ミュンヘン大学でベッテンコッフラーが世界で最初の衛生学教授となった時にはこの Hygiene が教室名に使われた。したがって、この時初めてこれが医学用語として登録されたことになる。

その後しばらくして日本では長与専斎が「衛生」という医学用語をつくったが、いつとはなしに Hygiene を衛生と訳するようになった。この意味で使われる Hygiene を「衛生学」と呼ぶことにしよう。

ところが、Hygiene という言葉はギリシヤ女神の Hygieia から生まれた言葉であつて、ベッテンコッフラーの専売ではない。これは一般語であつて、前近代的医学とか、民族医学とか、伝統医学などの意味も持っている。これを前者と区別するために、ここでは「養生論」と呼ぶことにしよう。このシンポジウムに参加した人たちがどちらの意味に解釈したかによって大きく二群に分類される。本書には十人の分担執筆者がいるが、Hygiene を学術用語すなわち「衛生学」と解した人は四人で、国籍別にみると日本三人、米国一人である。言うまでもなく、いずれも近代史を論じている。一方、これを一般語すなわち「養生論」とみた人は六人で、国籍別にみると日本人二人、米国人一人、英国人一人、中国人一人、韓国人一人で、その論文の内容はいずれも中世史な